



Title	質疑応答
Citation	RA協議会第6回年次大会F-1セッション / 第8回JINSHA 情報共有会 報告書 : 異分野融合研究・プロジェクトにおけるURAの役割について考える, 69-74
Issue Date	2022-04-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87096
Type	conference presentation
File Information	7_RA6_F1_QA.pdf



[Instructions for use](#)

質疑応答



中野 (司会)：ご発表内容が大変盛りだくさんで、それぞれお話を伺いしたいところですが、あまり時間もございませんので、残った時間で総論的な質問を皆さんのほうに投げかけたいと思います。

いわゆる学際研究や分野融合研究をする場合、何のために融合するのかという目的がはっきりしないと融合すること自体が目的になってしまうことがあるとの指摘が稲石さんからありました。新潟大学の事例のように研究者が互いに自分の専門以外の研究分野を求めているケースもあるとのことですが、このような事例はまだまだレアケースだと思います。また、いわゆる自然科学主導で科学技術研究が先行した結果、ELSI問題に絞った非常に部分的な人社系の参画・融合が求められている状況もあり、まだまだコミュニケーションの難しさが障害となっているのが現状だろうと考えています。

この辺りについて、皆さんから他のご発表もお聞きになっての補足やコメントなどお願いできればと思います。押海さんにも、研究推進のための業績評価という方向からコメントいただければと思います。

稲石：通して聞いていて、私の発表の中でも少しお話ししましたが、研究評価をどう考えるかという点、最後、押海さんのご発表で随分言っていただけだと思いますし、岸本先生のお話にもありましたが、重要なポイントであると感じました。インパクト評価のようなことが、まだ日本では余りなされていませんが、学際や分野横断研究では、社会性の高い研究が多いので、今後、インパクト評価を日本がどのように導入していくかということと、学際の評価のことは並行して進めていく課題なのかなと思いました。

久間木：理想的な状況を言うと、密でありつつも気軽なコミュニケーションを研究者同士でとれる状況も一つの解かなと思います。今回、岸本先生のご発表で伺った阪大 ELSI センター設置は、こういうものが必要だということを見る状態にした点が、すごいことだと感銘しました。皆様の発表から人社系研究がどれだけ社会に寄与しているかということの見える化や、人社系が自ら評価基軸を見せることが大事であることも感じました。

押海：融合研究という形ではなく、人社系研究そのものをどう評価するのかというのがかなり重要な問題になります。今回の発表ではその点は触れていなかったのですが、やはりまだまだ議論が足りない部分だと思います。ただし、C-1のセッションで、理系の評価もやっぱり難しいよねというのが最初に話されていたので、さらに議論すべき様々な問題が残っていると思います。私は、人間文化研究機構という人文学の研究機関にいますので、今後も人文系研究をどう評価するのかという点はきちんと考えていこうと思っています。

岸本：多分、ELSIは、非常に文理融合のコラボレーションがしやすいフレミングだと思うのですね。お互いに求め合ってマッチングする分には良いのですが、もっと積極的にやろうとしたら、例えば、人文社会系の研究者が脳科学のELSIをやりたいと言って脳科学の先生のところ押し掛けるものの、脳科学の先生がそんなこと全く考えてもいなかった場合というのが出てくると思います。現在、幸い、我々は依頼が来た案件をこなすだけで精一杯なので、

営業活動まではしていないので、そういうミスマッチはまだ生じていないのですが、ELSI 研究を早めにも実施しておいた方が良く強く感じた場合に先方を説得するための材料として、ある種の失敗事例集を用意しておいて、説得材料に使おうかといったことは考えています。逆に、我々に ELSI 研究を依頼される場合は、今のところ予想の範囲内のものが来ているのですが、想定外のもの came した場合にどうするかという課題はあるかもしれません。ただ、僕なんかは何でもやってみたいタイプなので、とりあえず引き受けるのではないかと考えていますが、線引きをどうするかは今後考えていく必要があると思っています。

中野 (司会)：みなさま、ありがとうございます。では、セッションの最後に一言ずつお願いいたします。

稲石：今の岸本先生の失敗事例集というのはすごく面白いアイデアだなと思いました。私も事例集というか、こういうことが人社や、京都大学でできますよという例をもっと人社の側から発信していくべきだなというのが発表の趣旨でもあったのですが、そういう取り組みを人社系 URA ネットワークで何かしらできないかと思っていました。グッドプラクティスだけではなくて、こういう失敗例がありますというのを、ぜひ、できるといいなと思いました。

久間木：今回の発表内容は関わる研究者の人依存の点が多くあったので、これからは組織的にできることも考える必要性を感じました。非常に勉強させていただきました。ありがとうございます。

岸本：今日は触れなかったのですが、私は、おそらく初の社会科学系の研究者として産総研に 15 年ほど在籍していました。その間に、心理学や経済学を専門とするポスドクなどの若手がたまに来るのですが、対象となる科学技術をデータや材料としか捉えないという人はなかなか長続きしないという印象があります。ちゃんとした学際研究を行うには、ある程度、対象をきちんと理解しようとして中にもだがかつり入っていくこと、言い換えると対象に対して愛が

あること、が必要なんだと思いました。

押海：今回の皆さんのご発表で、人文系の学問は価値を創造したり価値に関係するものだとおっしゃっていて、僕も本当にそうだと思います。人間文化研究機構も同じような考えを出しているのですが、価値の創造などをどう表現するかというのは結構難しいと感じます。ELSIとか、社会課題の解決に関わるということで価値を創造するということもありますし、人社系の適切な評価によって今まで見えなかったものを見るようにして人社系研究の価値を広く見てもらうということも大事かと思いました。

中野（司会）：ご登壇者の皆さん、ありがとうございます。それでは、すこし時間が延びてしまいましたが、これでF-1セッションを終了したいと思います。どうもありがとうございました。

F-1：研究プロジェクトのマネージメント

開催日時・会場 9月18日(金曜日) 10:45 - 12:15 会場B

異分野融合研究プロジェクトにおける URAの役割について考える

近年、複雑化する地球規模の課題を解決する方法の一つとして、人社系研究分野を含む異分野融合研究・プロジェクトの必要性が叫ばれている。EUでのResponsible Research and Innovation(RRI)という考え方やOECDの「社会課題解決のためのトランスディシプリナリ研究」はその代表的な例である。日本でも、科学技術基本法の改正に象徴されるように、人社系研究分野を含む科学技術の振興・イノベーションの創出が求められるようになってきている。

このような国内外の動向を見据えつつ、本セッションでは、異分野融合研究プロジェクトでの人文・社会科学分野の役割、そこでのURAの役割を考えるために、人社系の参画・主導で実施されている既存のプロジェクトや取り組みに着目する。そして、そこから抽出される人社系研究分野の関わり方や参画の形について参加者と検討し、人社系研究分野がプロジェクトに参画・主導する際の課題や成功のカギをURAの立場から考えることを目的とする。

今回、講演いただくのは、以下の4事例である：

- 1) 京都大学の学内ファンド・融合チーム研究プログラムSPRITSや学際センターの事業等で、人社系が関わる事例のテーマや傾向、URAの役割について
- 2) 新潟大学の融合研究推進(U-goプログラム等)で取り組む、人社系分野が先導し分野融合システムで実施する研究でのURAの役割について
- 3) 2020年4月設立の大阪大学・社会技術共創研究センター(ELSIセンター)の紹介および、自然科学系大型プロジェクトに人社系が貢献する連携のあり方、URAへの期待について
- 4) 人社系分野がかかわる学際プロジェクトの評価方法の問題提起として、総合地球環境学研究所の取り組みについて

なお、本セッションは、人文社会科学系URAネットワーク幹事校(大阪大学、筑波大学、京都大学、早稲田大学、琉球大学、北海道大学、横浜国立大学、中央大学)と共同で実施する。また、本セッションでの議論は、2020年10月に同幹事校主催・共催にて開催予定の第6回人社系フォーラム「人社主導の学際研究プロジェクト創出を目指して～未来社会を拓く人文学・社会科学の現在と展望」(開催校：北海道大学)へと接続し、さらに検討を深める。

セッション担当者



中野 悦子：北海道大学 大学力強化推進本部
研究推進ハブ URAステーション
主任URA

京都府出身。大阪市立大学大学院法学研究科後期博士課程単位取得退学(修士(法学))。民間企業勤務後、2011年から龍谷大学にて文科省助成事業のプロジェクト担当として研究推進業務に携わる。2015年北海道大学大学院文学研究科に部局URAとして着任、部局の研究推進業務に従事。2018年本部URAステーションへ異動し、主に科研費等外部資金獲得関連業務、人社系研究推進を担当。

登壇者



稲石 奈津子：京都大学
学術研究支援室(KURA)
シニアURA

助成財団のプログラム・オフィサーを経て、2003年より早稲田大学にてCOEプログラムの研究支援業務に従事。2013年より京都大学のリサーチ・アドミニストレーターとして文系部局を担当。研究者に近い位置で研究支援に努めながら、人社系の研究環境の改善や研究成果発信に取り組んでいる。現在、京都大学の指定国立大学法人関連事業「人社未来形発信ユニット」にも携わり、これからの人社系研究の社会へのあり方について思考中。



久間木 寧子：新潟大学
研究企画室
主任URA

微生物の酵素研究で博士号取得後、省庁系の研究機関での博士研究員経験を経て、2013年2月から新潟大学URAに。外部資金獲得支援、研究推進に関わる企画や科研費等を中心としたデータ分析を担当。



岸本 充生：大阪大学
社会技術共創研究センター
センター長

京都大学で博士(経済学)取得後、通産省の工業技術院資源環境技術総合研究所に入所、独法化後、産業技術総合研究所安全科学研究部門の研究グループ長を経て、2014年から東京大学公共政策大学院特任教授。2017年から大阪大学データリテリシティフロンティア機構教授。2020年4月からは新設の社会技術共創研究センター長を兼任。原子力規制庁放射線審議会や総務省政策評価制度部会等の委員や国立国会図書館の客員調査員を務める。



押海 圭一：人間文化研究機構
機構長室
特任助教

2011年より人間文化研究機構・総合地球環境学研究所にて研究推進、研究IR、国立大学法人評価業務などを担当。琉球大学でのURA経験を経て、2020年からは人文機構本部の評価・IR担当者として、研究(理系、人文学、社会科学、学際研究などを含む)を推進し、研究者や研究機関の活力を高めるために本当に必要・有効な評価とは何か、ということ日々考えています。日本評価学会認定評価士。法務博士(専門職)。

略歴等は、2020年9月当時のものです。